

平成15年度公開講座・公開授業アンケート調査の実施報告

生涯学習教育研究センター 助教授 木 暮 照 正

1 はじめに

昨年度より、生涯学習教育研究センターは、本学公開講座委員会の方針を受けて、地域の生涯学習ニーズに関する情報を収集し、本学が実施する生涯学習支援活動の参考とするために、各種のアンケート調査を実施してきた（木暮・筒井，2003）。今年度も引き続き、本学が主催した公開講座の受講者を対象としてアンケート調査を実施したので、本稿でその概要を報告する（調査1：公開講座受講者向けアンケート調査）。

今年度は公開講座以外の生涯学習支援の取り組みとして、公開講座委員会提案で、正規授業の一部を一般市民に開放する公開授業を試行として開始した。公開授業の全国的な動向やメリット等は次項で触れることとするが、本学では初めての取り組みであるため、地域への周知や本学の運営体制等、解決しなければならない問題も残されている。この問題解決の一助として、公開授業の受講者並びに担当講師を対象としてアンケート調査を実施したので、加えて報告する（調査2：公開授業受講者向けアンケート調査；調査3：公開授業講師向けアンケート調査）。

2 公開授業について

公開授業の取り組みは、滋賀大学が公開講座事業の多様化に対応するための一つの方策として、平成9年より開始し、全国的に広まったものである（滋賀大学生涯学習教育研究センター，2003）。公開授業とは、正規授業のコマ数の全部もしくは一部を公開講座として一般市民に開放するという仕組みである。滋賀大学の場合、科目担当教員の判断で開放ができるという、いわば「自由参加型」方式を貫いてきた。しかし、信州大学が、平成13年から全授業のほとんどを一般開放するという「市民開放授業」を開始し、続いて富山大学も平成14年より同種の事業（富山大学オープン・クラス）に取り組んでいるところである（富山大学生涯学習教育研究センター，2003）。公開授業は「自由参加型」もしくは小中規模な事業を超え、「大規模型」

事業として展開されつつあるというのが現状である。ただ、規模の大小に関わらず、法人化を踏まえた現在、公開授業が地域貢献策の一つとして注目に値する取り組みであることは間違いない。

正規授業を一般市民に開放するという公開授業は、通常の公開講座と異なり、「新規に講座を企画して立ち上げる必要がないこと」と「より専門的な講義内容が保証されること」の2点においてメリットがある。前者のメリットについては言うに及ばないが、後者のメリットについては、受講者側のニーズを踏まえたものである。通常の公開講座あるいは公民館等で開催される各種講座は、広く一般向けに企画されており、内容が平易なものになるよう配慮されている。これは、翻って言えば、専門的で高度な内容を期待する市民にとっては満足いくものにはならない。一方、大学等高等教育機関が専門性の高い公開講座を企画したとしても、興味関心をもつ層は必ずしも多くないために、受講者がなかなか集まらず、結果として講座が成立しなくなることもある。この点、公開授業であれば、正規授業としてすでに開設が決まっているので、仮に受講者がごく少数でも開催される保証があり、かつ、より専門的な内容を求める受講者のニーズも満たされるわけである。さらに授業の場合、「共通教育」「専門教育」とレベルに応じた科目群が用意されているので、受講者の希望するレベルに応じて、科目を選択することも可能になる。

しかしながら、公開授業には、先行大学での実施当初からある種の制約が付きまっていた。大抵の大学には、科目の単位を取得するための制度として「科目等履修生制度」が、単位を必要とせず聴講するための制度として「聴講生制度」が、それぞれ存在する。因みに本学にも、実態は別としても、聴講生制度は存在している。つまり、公開授業の仕組みを使わなくても、既存の「聴講生制度」を利用すれば、一般市民であっても授業に参加することは可能だったわけである。もちろん、聴講生は学生的一种と考えられ、入学検定料等がかかる他、科目当たりの単価も公開講座を基準として算定される公開授業と比べて高価である。比較

的安価で一般市民に大学の授業を提供できる公開授業は画期的な取り組みであったわけだが、同じ授業を別の仕組みで聴講しようという制度上の矛盾を抱えかねない。この矛盾を解消するために、先行大学では公開授業は正規授業コマの一部の開放（半数以下）にとどめて実施を始めた。これがいわゆる公開授業の開講における制約である。先行大学においてもこの制約は実施上の問題として取り上げられることが多い。まず、正規授業は半期であれば15回でまとまるように設計されており、公開授業として開講するには、その一部だけを聴講しても話が成立するように再編成するなどの工夫が必要になる。これは講師側にとって負担になる。また、受講者側も一連の授業の途中で参加できなくなことは、ある種の不満につながりかねない。

本学の公開授業の試行においても、先行大学に倣い、基本的にこの制約に基づいた開放を行うこととし、試験等を除く正式の開放は6コマ9時間とした。しかしながら、正規授業の約半数の開放が担当講師および受講者にどのように評価されているのかは大変気になるところである。そこで、調査2（公開授業受講者向けアンケート調査）と調査3（公開授業講師向けアンケート調査）では、この制約に関する質問項目を特別に設けて、相応しいと思われる講義の長さについて質問することとした。

3 調査1：公開講座受講者向けアンケート調査

目 的

調査1は、昨年度の調査（木暮・筒井，2003）に倣い、今年度福島大学で実施した公開講座の受講者を対象として実施した。今年度は合計15講座が企画され、うち13講座が実施されたが、アンケート調査を実施したのは原町市教育委員会と共催で実施された「化学へのいざない」と「家庭教育講座」の2講座を除く、11講座であった（講座名と開設期間は下記の通り：「労働組合と法（5－6月実施）」「これからの高齢学（6月実施）」「知識獲得の心理学（7－8月実施）」「心理学ステップアップ1（8－9月実施）」「子ども学入門Ⅱ（9月実施）」「心理学ステップアップ2（9－10月実施）」「心理学ステップアップ3（10－11月実施）」「簿記会計の基礎から最新の会計革命・税改革まで学ぶ（9月実施）」「古代中国の神々（10月実施）」「日本の音楽文化を読み解く（10－11月実施）」「アメリカが

動かす国際社会（10－11月実施）」）。

調査方法

被調査者

今年度福島大学が主催した公開講座を受講した方のうち、アンケートに回答した136名（延べ数）を対象とした。一人で複数の講座を受講した方もいたが、アンケートは無記名方式であって個人同定をする手段がないため、データにはいくぶん重複があると思われる。

質問紙構成

問1は、被調査者の個人属性に関する質問項目から構成された。年齢（問1－1）、性別（問1－2）、市町村レベルの住所（問1－3）、職業（問1－4）、同居家族（問1－5；複数回答）、最終学歴（問1－6）をそれぞれ質問した。

問2は、今回受講した公開講座に関する質問項目から構成された。講座を知った情報源（問2－1）、受講講座の難易度（問2－2）および感想を問う項目（問2－3；自由記述）をそれぞれ質問した。

問3は、今後の生涯学習講座への参加希望に関する質問から構成された。今回受講した講座と関連のある講座への参加希望の有無（問3－1）、直前の問と関連して、参加するとして希望する講座の難易度設定（問3－2）、具体的な要望（問3－3；自由記述）および今回受講した講座と関連のない講座への参加希望の有無（問3－4）をそれぞれ質問した。

問4は、福島大学の公開講座に対する要望を問う質問項目から構成された。まず、どのような種別の講座を希望するかを「教養を重視した講座（例：文学・歴史や時事問題を紹介する講座）」「資格取得を目指した講座（例：行政書士や介護福祉士の資格取得講座）」「実技の習得を目指した講座（例：英会話講座やパソコン講座）」「趣味を充実させる講座（例：スポーツ講座やガーデニング講座）」「その他（被調査者側で具体的に記述）」から選択させた（問4－1；複数回答）。続いて、希望する講座内容の具体的なテーマについて質問した（問4－2；自由記述）。最後に全般的な要望について質問した（問4－3；自由記述）。

なお、具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

手 続

被調査者の便宜を考慮し、各公開講座が終了する1つ前の回でアンケート用紙を受講者に手渡し、終了回に提出いただくという方法を採用した。

結 果

以下、アンケート集計の結果概要について、表を参照しながら述べる。

問1の回答から被調査者の個人属性の分布傾向についてまとめる。表1に調査1の年齢と性別の分布を示した。男性41名、女性95名で、平均年齢は48.0歳（男性47.6歳、女性48.1歳）であった。男女ともに40歳代が最も多く、続いて50歳代、30歳代の順となった。表2に市町村レベルの住所の回答分布を示した。本学の立地する福島市居住者がほぼ7割を占めていた。表3と表4に受講者の職業分布を示した。男性では公務員、無職、会社員が、女性では専業主婦、会社員がそれぞれ多かった。表5に同居家族構成の回答分布を示した。男女共に配偶者、子ども、親との同居が多いことが窺

えた。表6に受講者の最終学歴の回答分布を示した。男女共に高等学校卒と大学卒が多く、女性の場合は短大卒も多かった。

表3 調査1：職業分布

職業	全体	男性	女性
会社員	27(20.1%)	9(22.5%)	18(19.1%)
公務員	33(24.6%)	17(42.5%)	16(17.0%)
自営業	6(4.5%)	0(0.0%)	6(6.4%)
専業主婦	23(17.2%)	0(0.0%)	23(24.5%)
パートタイマー	15(11.2%)	0(0.0%)	15(16.0%)
無職	16(11.9%)	10(25.0%)	6(6.4%)
その他	14(10.4%)	4(10.0%)	10(10.6%)
計	134	40	94

表4 調査1：職業のその他の内訳

職業	全体	男性	女性
看護師	4	0	4
団体職員	3	2	1
保育士	2	0	2
会社顧問	1	1	0
学生	1	1	0
講師	1	0	1
事務職	1	0	1
相談員	1	0	1

表1 調査1：年齢と性別の分布

（頻度、括弧内は％。以下同様）

年齢範囲	全体	男性	女性
20歳代	7(5.1%)	3(7.3%)	4(4.2%)
30歳代	27(19.9%)	8(19.5%)	19(20.0%)
40歳代	43(31.6%)	12(29.3%)	31(32.6%)
50歳代	37(27.2%)	10(24.4%)	27(28.4%)
60歳代	18(13.2%)	6(14.6%)	12(12.6%)
70歳代以上	4(2.9%)	2(4.9%)	2(2.1%)
計	136	41	95

表2 調査1：住所分布

住所	全体	男性	女性
福島市	95	22	73
いわき市	5	4	1
伊達町	5	4	1
郡山市	5	3	2
二本松市	4	0	4
本宮町	4	2	2
川俣町	3	0	3
会津若松市	2	1	1
東和町	2	0	2
保原町	2	0	2
会津本郷町	1	0	1
喜多方市	1	0	1
月舘町	1	0	1
山形県南陽市	1	1	0
熱塩加納村	1	1	0
八戸市	1	1	0
飯野町	1	1	0
計	134	40	94

表5 調査1：同居家族構成（延べ数）

	全体	男性	女性
いない	19	4	15
親	52	14	38
配偶者	91	31	60
子ども	62	19	43
その他	7	1	6

表6 調査1：最終学歴

学校歴	全体	男性	女性
高校卒	53(39.0%)	12(29.3%)	41(43.2%)
専門学校卒	13(9.6%)	2(4.9%)	11(11.6%)
大学在学中	1(0.7%)	1(2.4%)	0(0.0%)
大学中退	1(0.7%)	1(2.4%)	0(0.0%)
短大卒	19(14.0%)	0(0.0%)	19(20.0%)
大学卒	38(27.9%)	18(43.9%)	20(21.1%)
大学院修了	8(5.9%)	6(14.6%)	2(2.1%)
旧制高等小学校卒	1(0.7%)	1(2.4%)	0(0.0%)
旧制高等女学校卒	2(1.5%)	0(0.0%)	2(2.1%)
計	136	41	95

問2の回答から、講座を知った情報源と受講講座の難易度評価の傾向についてまとめる。表7に講座を知った情報源の回答分布を示した。男女ともに新聞の折り込みチラシを通じて知ったという回答が多く、女性の場合はこれに新聞記事が続いた。また、公開講座案内（本学のパンフレット）を通じて知ったという回答も比較的多かった。

表8に受講講座の難易度評価の回答分布を示した。男女差は見られず、「ちょうどよかった」という意見が約3分の2を占めた。

表7 調査1：講座を知った情報源（延べ数）

情報源	全体	男性	女性
新聞の折り込みチラシ	70	17	53
新聞の記事	17	2	15
テレビ	2	0	2
ラジオ	0	0	0
インターネット	17	9	8
知人・友人の紹介	21	10	11
その他	34	10	24

備考：その他で複数回答のあったもの。公開講座案内（21）、職場（6）。

表8 調査1：受講講座の難易度

講義の難易度	全体	男性	女性
易しすぎた	5(4.0%)	0(0.0%)	5(5.7%)
やや易しかった	24(19.0%)	9(23.1%)	15(17.2%)
ちょうどよかった	81(64.3%)	25(64.1%)	56(64.4%)
やや難しかった	15(11.9%)	4(10.3%)	11(12.6%)
難しかった	1(0.8%)	1(2.6%)	0(0.0%)
計	126	39	87

問3の回答から、今後の生涯学習講座への参加希望の傾向をまとめる。表9に関連講座への参加希望の内、参加の有無の回答分布を示した。「参加したいとは思わない」という意見はなく、「是非参加してみたい」が約3分の1、「適切な講座があれば参加したい」が約3分の2であった。表10に関連講座への参加希望の内、内容の回答分布を示した。男性では「（多少難易度が上がってもよいので）より詳しい内容を扱う講座」と「（難易度を上げずに）詳しい内容を扱う講座」を希望している人数はほぼ同数であったが、女性では「（難易度を上げずに）詳しい内容を扱う講座」を希望する傾向が窺えた。表11にその他の講座への参加希望の回答分布を示した。「参加する予定はないが、適切な講座があれば参加したい」という意見が8割を占めた。

表9 調査1：関連講座への参加希望（有無）

	全体	男性	女性
是非参加したい	42(30.9%)	11(26.8%)	31(32.6%)
適切な講座があれば参加したい	94(69.1%)	30(73.2%)	64(67.4%)
参加したいとは思わない	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
計	136	41	95

表10 調査1：関連講座への参加希望（内容）

	全体	男性	女性
（多少難易度が上がってもよいので）より詳しい内容を扱う講座	47(37.3%)	18(46.2%)	29(33.3%)
（難易度を上げずに）詳しい内容を扱う講座	55(43.7%)	16(41.0%)	39(44.8%)
（今回の講座と内容が重ならなければ）同程度の講座	24(19.0%)	5(12.8%)	19(21.8%)
計	126	39	87

表11 調査1：その他への講座への参加希望（有無）

	合計	男性	女性
参加する予定がある	25(18.4%)	7(17.1%)	18(18.9%)
参加する予定はないが、適切な講座があれば参加したい	111(81.6%)	34(82.9%)	77(81.1%)
参加する予定はないし、特に参加する希望もない	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
計	136	41	95

問4の回答から、福島大学の公開講座に対する要望の傾向をまとめる。表12に福島大学に希望する生涯学習内容の回答分布を示した。教養型講座の希望が一番多く、続いて資格型講座の希望が多かった。表13に福島大学に希望する生涯学習内容の具体的なテーマを示した。心理学、文学、法学・政治学、歴史学、時事問題といった内容が上位に並んだ。表14に福島大学の生涯学習活動への要望に関する自由記述のうち、複数回答が認められたものを示した。「交通の便のよい会場での開催」や「駐車場のある会場での開催」等、主として会場に言及にしたものが多かった。また、「申込み方法の再考」や「受講定員の増加」等、主として公開講座の実施手続に関する要望や、「長期にわたる講座の開設」や「複数の講座開設」等、公開講座の拡充を求める要望も認められた。

表12 調査1：福島大学に希望する生涯学習内容
(延べ数)

	合計	男性	女性
教養型	95	27	68
資格型	49	14	35
実技型	40	9	31
趣味型	35	12	23
その他	14	6	8

表13 調査1：福島大学に希望する生涯学習の内容
の具体的テーマ(延べ数)

テーマ	頻度
心理学	15
文学	11
法学・政治学	11
歴史学	10
時事問題	9
IT 講座	6
音楽・美術	6
経済学・経営学	6
資格取得支援講座	6
教育論	5
スポーツ講座	3
英会話	3
高齢学	3
子ども学	3
ガーデニング	2
国際社会論	2
年金問題	2

註) 複数回答があったもののみ揭示

表14 調査1：福島大学の生涯学習支援活動に対する
要望

要望	頻度
交通の便のよい会場での開催	14
長期に渡って開催される講座	7
申し込み方法の再考	5
駐車場のある会場での開催	5
複数の講座開設を希望	5
テレビ会議室を利用した講座の複数開設	4
受講定員の増加	4
夜間講座の開始時間の再考	4
参加者同士の討論	3
講座の時間配分の再考	2
資格取得支援講座	2
受講料の値下げ	2
福島市以外での開催	2
休憩時間の明示	2

註) 複数回答があったもののみ揭示

ま と め

一人で複数の講座を受講した方もおり、そのため多少のデータ重複はありうるものの、個人情報の分布から、次のことが示唆された。女性が3分の2を占めるものの、年齢については男女ともに40歳代を中心に比較的バランスの取れた分布であった。また、職業分布(表3と4参照)において比較的有職者が多い傾向も見られ、時間的に余裕が少ないと予想される成人中期層が比較的多く参加している傾向が読み取れた。

公開講座および公開授業の広報のために、平成15年3月末に福島市近郊地区に新聞折り込み広告を配布したところ、予想に反して大きな反響を呼んだ。年度当初は担当事務に電話連絡が殺到するという状況であった。表7からも分かるとおり、情報媒体の中で新聞折り込み広告が圧倒的多数を占めたことから、インターネット全盛期における今日でも、紙媒体による広告効果には目を見張るものがあるといえる。コスト面も考慮しなければならないが、大学の立地条件等から生涯学習のターゲットが限定できる場合には、新聞折り込み広告のような紙媒体による広報を積極的に利用することは有効であるといえよう。

過去に本学公開講座を受講した方には年度始めに公開講座案内というパンフレットを郵送しているが、この案内から講座を知ったという回答も少なくなかった。生涯学習ではリピーターの存在が重視されるが、特に大学等高等教育機関が主催する専門的な講座の場合、そもそも関心をもつ層はそれほど多くないと予想されるので、リピーターの発掘のためにも既受講者に公開講座案内等のパンフレットを送付することは重要である。

また、少数意見ではあるものの、職場を通じて知ったという回答もあった。比較的有職者が多いことから、職場の掲示板等の目ざろ目にしやすいところにポスターを掲示することも有効な手段の一つである。特に、関心をもつことが予想される業種の会社や団体に絞って広報することも必要と考えられる。

受講講座の難易度については概ね適切であったとの評価を得ている。いくつかの異なる講座でのアンケートを全体的として集計しているので、一意の結論を導くことは難しいものの、簡単すぎたり難しすぎたりと言った極端な傾向はないと思われる。

今後の生涯学習講座への参加希望については、比較的多数の人が「適切な講座があれば」分野は問わずに「参加したい」と回答している。女性の場合は「難易度を上げずに詳しい内容を扱う講座」を希望しており、

男性の場合は「多少難易度が上がっても」構わないとする回答が多かった。性別によって多少回答に違いはあるものの、難易度は上げずに詳しい内容を扱う講座、すなわちテーマを絞った講座が求められている傾向が読み取れた。しかしながら、既に「2 公開授業について」の箇所ですべてとおり、公開講座でこのような学習ニーズに応えることは難しい。このような学習ニーズに応えるためには、やはり公開授業の活用を積極的に推し進めていくことが、差し当たり最も有効な手立てと思われる。

希望する生涯学習内容については、教養型、資格型の順で希望が多かった。前年度実施した公開講座アンケート（木暮・筒井，2003）では、教養型の希望が多く、資格型の希望は少ない傾向を示していたことから、やや資格型の希望が増加している傾向が読み取れる。また、このことは表14の要望の自由記述において「資格取得支援講座」の企画を希望する回答が寄せられていることから示唆される。これは前年度調査と比べて、有職者の比率が上昇しているためかもしれない。

希望するテーマの具体例については、文学や歴史学等、生涯学習分野では根強い人気を保っている教養分野に加えて、心理学、法学・政治学、時事問題等、今年度本学が開催した講座内容に近い分野が挙げられていた。後者の希望テーマについては、自分が参加した講座の続編や関連した講座を受講することで学習を深めたいという要望が反映しているのではないかと考えられる。

福島大学の公開講座に対する要望については、大きく分けると、会場に関する要望（「交通の便のよい会場での開催」や「駐車場のある会場での開催」等）、公開講座の実施手続に関する要望（「申込み方法の再考」や「受講定員の増加」等）および公開講座の拡充を求める要望（「長期にわたる講座の開設」や「複数の講座開設」等）の3つが抽出された。特に講座拡充の要望は、昨年度のアンケート調査（木暮・筒井，2003）からも示唆された点であり、地域からの期待に応えるためには、より一層の公開講座拡充を目指す必要があると考えられる。

4 調査2：公開授業受講者向けアンケート調査

目 的

今年度は初年度ながら、前期科目34科目、後期科目

16科目、計50科目を公開授業として開放することができ、そのうち前期科目22科目で延べ72名、後期科目12科目で延べ21名、計34科目延べ93名の方を受講者として受け入れることができた。本学公開授業の改善・発展を検討するための一助として、受講者および担当講師を対象にアンケート調査を実施したが、この項ではまず受講者向けアンケートの結果を報告する。

調査方法

被調査者

今年度の公開授業を受講した方のうち、平成15年12月末の時点でアンケートに回答した53名（延べ数）を対象とした。一人で複数の授業を受講した方もいたが、アンケートは無記名方式であって個人同定をする手段がないため、データにはいくぶん重複があると思われる。

質問紙構成

問1は、調査1の問1と同様に、被調査者の個人属性に関する質問項目から構成された。年齢（問1-1）、性別（問1-2）、最終学歴（問1-3）、市町村レベルの住所（問1-4）、職業（問1-5）、同居家族（問1-6；複数回答）、をそれぞれ質問した。

問2は、受講者が過去1年間に何回の生涯学習講座に参加したかを問う質問項目であった（問2-1）。

問3は、今回受講した公開授業に関する質問項目から構成された。講座を知った情報源（問3-1）、受講講座の難易度（問2-2）、一般学生と一緒に授業を受けるといふ公開授業の形態への賛否（問3-3）、公開授業の回数の適切さ（問3-4）、望ましい回数（問3-5；自由記述）、公開授業を受講した理由（問3-6）、同じ内容が公開講座として企画された場合に受講するか否か（問3-7）、問3-7の選択理由（問3-8）および感想を問う項目（問3-9；自由記述）をそれぞれ質問した。

問4は、調査1の問3と同様に、今後の生涯学習講座への参加希望に関する質問から構成された。今回受講した授業と関連のある講座への参加希望の有無（問4-1）、直前の問と関連して、参加するとして希望する講座の難易度設定（問4-2）、今回受講した講座と関連のない講座への参加希望の有無（問4-3）および福島大学の生涯学習支援活動全般に対する要望について質問した（問4-4；自由記述）をそれぞれ質問した。

なお、具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

手 続

公開授業の担当講師に受講者用のアンケートを事前に配布し、実施を依頼した。基本的には、開放コマの終了回にアンケート用紙を受講者に配布し、回答の上、担当講師に提出していただき、担当講師はそれを取りまとめの上、生涯学習教育研究センターに提出していただくという方式で行った。

結 果

以下、アンケート集計の結果概要について、表を参照しながら述べる。

問1の回答から被調査者の個人属性の分布傾向についてまとめる。表15に調査1の年齢と性別の分布を示した。男性25名、女性28名で、平均年齢は51.9歳（男性57.4歳、女性47.0歳）であった。全体としては50歳代が最も多く、男性では50歳代、女性では40～50歳代が多かった。表16に受講者の最終学歴の回答分布を示した。調査1と同様に、男女共に高等学校卒と大学卒が多く、女性の場合は短大卒も多かった。表17に市町村レベルの住所の回答分布を示した。福島市居住者がはば5割を占めている。表18と表19に受講者の職業分布を示した。男性では無職、公務員が、女性では専業主婦がそれぞれ多かった。表20に同居家族構成の回答分布を示した。男女共に配偶者、子ども、親との同居が多いことが窺えた。

表15 調査2：年齢と性別の分布

年代	全体	男性	女性
20歳代	3(5.7%)	1(4.0%)	2(7.1%)
30歳代	5(9.4%)	0(0.0%)	5(17.9%)
40歳代	13(24.5%)	4(16.0%)	9(32.1%)
50歳代	18(34.0%)	10(40.0%)	8(28.6%)
60歳代	10(18.9%)	6(24.0%)	4(14.3%)
70歳代	4(7.5%)	4(16.0%)	0(0.0%)
計	53	25	28

表16 調査2：最終学歴

学校歴	全体	男性	女性
高校卒	14(26.9%)	8(33.3%)	6(21.4%)
専門学校卒	4(7.7%)	3(12.5%)	1(3.6%)
短大卒	8(15.4%)	1(4.2%)	7(25.0%)
大学卒	25(48.1%)	11(45.8%)	14(50.0%)
大学院修了	1(1.9%)	1(4.2%)	0(0.0%)
計	52	24	28

問2の回答から、受講者の過去1年間の生涯学習参加傾向を示す。表21に過去1年間の生涯学習参加の回数を示した。「0回」が最も多く、男女ともに4割を占めた。続いて、「1回」「2回」の順であった。

表17 調査2：住所分布

住所	全体	男性	女性
福島市	27	11	16
二本松市	6	1	5
川俣町	3	1	2
保原町	3	2	1
郡山市	2	1	1
三春町	2	2	0
須賀川市	2	0	2
本宮町	2	2	0
会津若松市	1	1	0
桑折町	1	1	0
西白河郡河東村	1	0	1
大玉村	1	1	0
白沢村	1	1	0
計	52	24	28

表18 調査2：職業分布

職業	全体	男性	女性
会社員	2(3.8%)	2(8.0%)	0(0.0%)
公務員	8(15.4%)	6(24.0%)	2(7.4%)
自営業	5(9.6%)	4(16.0%)	1(3.7%)
専業主婦	12(23.1%)	0(0.0%)	12(44.4%)
パートタイマー	2(3.8%)	0(0.0%)	2(7.4%)
無職	12(23.1%)	8(32.0%)	4(14.8%)
その他	11(21.1%)	5(20.0%)	6(22.2%)
計	52	25	27

表19 調査2：職業のその他の内訳

職業	全体	男性	女性
会社役員	2	2	0
ピアノ指導者	1	0	1
高校非常勤講師	1	0	1
財団職員	1	1	0
退職公務員	1	0	1
中学校非常勤教員	1	1	0
通訳・翻訳	1	0	1
日本語教師	1	1	0
非常勤講師	1	0	1
薬剤師	1	0	1

表20 調査2：同居家族構成（延べ数）

	全体	男性	女性
いない	3	1	2
親	18	8	10
配偶者	37	19	18
子ども	29	13	16
その他	3	1	2

表21 調査2：過去1年間の生涯学習参加回数

参加回数	全体	男性	女性
0	19(40.4%)	9(40.9%)	10(40.0%)
1	11(23.4%)	3(13.6%)	8(32.0%)
2	7(14.9%)	5(22.7%)	2(8.0%)
3	3(6.4%)	2(9.1%)	1(4.0%)
4	5(10.6%)	1(4.5%)	4(16.0%)
12	2(4.3%)	2(9.1%)	0(0.0%)
計	47	22	25

問3の回答から、講座を知った情報源、受講講座の難易度評価および公開授業という方式に対する評価の傾向についてまとめる。表22に講座を知った情報源の回答分布を示した。男女ともに新聞の折り込みチラシを通じて知ったという回答が多く、これに新聞記事が続いた。

表23に受講講座の難易度評価の回答分布を示した。男女差は見られず、「ちょうどよかった」という意見が約7割を占めた。

表24に学生と一緒に授業を受けるという形態への評価について、その回答分布を示した。男女ともに「一般学生とは別に、市民の受講者のみで授業を受けられた方がよい」という回答はなく、ほとんどが、「学生と一緒に受けられた方がよい」としている。表25に公開授業の開放コマの回数について、その回答分布を示した。男女差はなく「ちょうどよかった」という回答はなく、「少なかった」「やや少なかった」という回答で約7割を占めた。望ましい回数に関する自由記述から、過半数は10-12回の開放を求めていることが示唆された（有効回答27中、10-12回を望ましいとした回答は14であった）。表26に公開授業を選択した理由の回答分布を示した。男女差はなく約8割が「授業内容自体に関心があったから」と回答していた。表27に今回受講した公開授業が仮に公開講座として開催されていた場合、受講するか否かについて、その回答分布を示した。全体として「受講を希望する」という回答が多く、男性において顕著であった。

表22 調査2：講座を知った情報源（延べ数）

情報源	全体	男性	女性
新聞の折り込みチラシ	26	10	16
新聞の記事	15	5	10
テレビ	7	2	5
ラジオ	1	0	1
インターネット	6	3	3
知人・友人の紹介	6	2	4
その他	8	6	2

備考：その他で複数回答のあったもの。公開講座案内(3)。

表23 調査2：受講講座の難易度

講義の難易度	全体	男性	女性
易しすぎた	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
やや易しかった	7(13.7%)	4(17.4%)	3(10.7%)
ちょうどよかった	38(74.5%)	16(69.6%)	22(78.6%)
やや難しかった	6(11.8%)	3(13.0%)	3(10.7%)
難しかった	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
計	51	23	28

表24 調査2：公開授業の形態（一般学生との同席）

	全体	男性	女性
一般学生と一緒に授業を受けられた方がよい	43(86.0%)	21(95.5%)	22(78.6%)
一般学生とは別に、市民の受講者のみで授業を受けられた方がよい	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
どちらとも言えない	7(14.0%)	1(4.5%)	6(21.4%)
計	50	22	28

表25 調査2：公開授業の回数

	全体	男性	女性
少なかった	23(44.2%)	10(40.0%)	13(48.1%)
やや少なかった	14(26.9%)	7(28.0%)	7(25.9%)
ちょうどよかった	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
やや多かった	14(26.9%)	7(28.0%)	7(25.9%)
多すぎた	1(1.9%)	1(4.0%)	0(0.0%)
計	52	25	27

表26 調査2：公開授業選択の理由

	全体	男性	女性
授業内容自体に興味関心があったから	41(82.0%)	20(83.3%)	21(80.8%)
学生と一緒に授業を受講してみたかったから	3(6.0%)	2(8.3%)	1(3.8%)
資格取得などの目標があって、そのために活用できると思ったから	2(4.0%)	1(4.2%)	1(3.8%)
その他	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
計	50	24	26

表27 調査2：公開講座の場合の受講希望

	全体	男性	女性
受講を希望する	35(70.0%)	19(82.6%)	16(59.3%)
受講を希望しない	7(14.0%)	1(4.3%)	6(22.2%)
その他	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
計	42	20	22

問4の回答から、今後の生涯学習講座への参加希望の傾向をまとめる。表28に関連講座への参加希望の内、参加の有無の回答分布を示した。調査1と同様に、「参加したいとは思わない」という意見はなく、「是非参加してみたい」が約3分の1で「適切な講座があれば参加したい」が約3分の2であった。表29に関連講座への参加希望の内、内容の回答分布を示した。全般的に「(多少難易度が上がってもよいので)より詳しい内容を扱う講座」と「(難易度を上げずに)詳しい内容を扱う講座」を希望している人数はほぼ同数であった。表30にその他の講座への参加希望の回答分布を示した。全般的に「参加する予定がある」と「参加する予定はないが、適切な講座があれば参加したい」という意見が半々であった。福島大学の生涯学習活動に対する要望については、自由記述のうち複数回答が認められたものが4つあり、それぞれ「公開授業の拡大を希望(11)」「公開授業の継続を希望(9)」「広報の必要性(4)」「外国語科目を希望(2)」であった(括弧内は回答頻度)。

表28 調査2：関連講座への参加希望(有無)

	全体	男性	女性
是非参加したい	18(37.5%)	8(34.8%)	10(40.0%)
適切な講座があれば参加したい	30(62.5%)	15(65.2%)	15(60.0%)
参加したいとは思わない	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
計	48	23	25

表29 調査2：関連講座への参加希望(内容)

	全体	男性	女性
(多少難易度が上がってもよいので)より詳しい内容を扱う講座	19(42.2%)	11(50.0%)	8(34.8%)
(難易度を上げずに)詳しい内容を扱う講座	18(40.0%)	8(36.4%)	10(43.5%)
(今回の講座と内容が重ならない程度)同程度の講座	8(17.8%)	3(13.6%)	5(21.7%)
計	45	22	0

表30 調査2：その他への講座への参加希望(有無)

	全体	男性	女性
参加する予定がある	27(55.1%)	12(52.2%)	15(57.7%)
参加する予定はないが、適切な講座があれば参加したい	22(44.9%)	11(47.8%)	11(42.3%)
参加する予定はないし、特に参加する希望もない	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
計	49	23	26

まとめ

調査1と同様に、一人で複数の講座を受講した方もおり、そのため多少のデータ重複はありうるものの、個人情報の分布から、次のことが示唆された。男女比はほぼ同率であったが、年齢についてはやや高齢側に偏りが見られた。また、職業分布(表18)からも分かるように、調査1と比べると、生涯学習に典型的といわれる「高齢者」と「女性(専業主婦)」が多い傾向が認められた。公開授業の多くは昼間に開催されており、夜間や週末に開催される公開講座とは異なり、時間的に余裕のない成人中期層は参加しにくくなったと思われる。

過去1年間の生涯学習参加動向から、今回公開授業に参加した層は必ずしも生涯学習の常連層、つまりリピーター的な層ではないといえる。男女ともに約4割が過去1年間に講座に参加していないと回答しており、むしろこの公開授業を知ったことが契機となって生涯学習に参加するようになった層と考えられる。

調査1でも述べたとおり、今年度の公開講座および公開授業の広報のために、新聞折り込み広告を利用したが、公開授業についても情報源としては新聞折り込み広告が圧倒的多数を占めた。また、今年度は本学の公開授業の初年度であったということもあり、新聞やテレビ取材も何件か受けた。新聞については比較的早く報道してもらうことができたこともあり、新聞記事を通じて知ったという比率も相対的に高まったと思われる。折り込み広告は非常に有効ではあるが、コスト面を考慮すると配布地域は限定せざるを得ない。そのため福島市近郊地区以外の方には情報を伝えることができないというデメリットがある。受講者数が少ないとはいえど、公開講座・公開授業ともに福島市近郊以外の地区から参加する方もおり、県内各地に幅広く情報を伝えるためには新聞・テレビの報道等も媒体として重視していく必要がある。

受講講座の難易度評価については、調査1と同様に、概ね適切であったとの回答を得ている。一般市民向けに企画される公開講座とは異なり、公開授業は正規授業の開放であるので、一般に難易度は上がる。しかしながら、公開授業の受講を希望する人は難易度が高いからこそ希望するのであって、適切であったと評価するのは当然の結果ともいえる。

公開授業という形態に対する評価に関しては、大多数が「学生と一緒に受講する」形態を望んでおり、形態に問題はないと評価できる。一般市民の中には、大学という場で学習すること自体に価値を置く場合もあり、そのようなニーズを持っている人にとっては、むしろ公開講座よりも有効な形態であるとも考えられる。

公開授業の形態が支持された一方で、「学生と一緒に受講できる」ことを受講の理由とした比率は却って低かった。表27に示されているように、同種のテーマが公開講座で開催されたとしても約7割の人が参加を希望していることから考えると、基本的には内容に関心があるために受講をしているが、「学生と一緒に受講」は特に問題にならない、あるいはメリットがあると評価していると考えられる。少数意見ではあったが、自由感想の中で、現在の学生の状況を観察できたことがよかったという旨の回答を寄せる受講者もあり、一緒に学びつつも若者の現況自体に関心があるという層も見受けられた。

「2 公開授業について」で述べたように、実施上の問題として回数コマの制約が挙げられる。今回のアンケートでは公開授業という形態への評価とともに、特に回数コマの制約が受講者と担当講師にどのように受け止められているのかを検討することが課題であった。やはり開放回数については多くが少ないと評価しており、10-12回というほぼ正規授業と同様な回数の開放を求めていることが示された。

今後の生涯学習講座への参加希望については、調査1とは異なり、「分野の異なる講座に参加する予定がある」との回答が多くなっている。調査1では、分野の異なる生涯学習講座への参加を希望しつつも、実際の参加は未定という比率が高かったが、この相違はどのように解釈できるであろうか。一つには、公開授業の場合50科目が開放されており、一人の受講者が複数の講座を受講していた可能性が考えられる。無記名方式のアンケートであるため、実際の登録状況とアンケート回答者との対応付けは不可能であり、今後参加予定の講座が公開授業の他の科目を指しているのかは

定かではない。ただし、仮に、受講者は複数の科目を受講する傾向にあるとすると、関連した講座を一つのパッケージとして提示する等の情報提供が受講希望者にとって登録上の参考資料になる可能性も考えられる。しかしながら、「分野の異なる講座に参加する予定がある」との回答が多くなっていることから、非常に近い関連分野で徐々にレベルアップするような講座群のパッケージを提示するよりは、緩やかに関連した科目群（例えば、福島をテーマに地理、歴史、経済、文化など）をパッケージ化して提示する方が有益であるかもしれない。この点については今後の検討を要する課題である。

福島大学の生涯学習活動に対する要望では、調査1と同様に「公開授業の拡大を希望」および「公開授業の継続を希望」という、生涯学習講座の拡充に関する要望が多く挙げられていた。公開講座と公開授業の受講者層は異なると考えられるので、生涯学習支援の方策はそれぞれ相応しい方式を採用しなくてはならないが、どちらの層も内容の拡充への期待は高いと思われる。

5 調査3：公開授業講師向けアンケート調査

目 的

調査3は、福島大学公開授業の担当講師を対象とした。調査2と同様に、今後の公開授業の改善・発展を検討するための一助として実施した。

調査方法

被調査者

今年度の公開授業の担当講師のうち、平成15年12月末の時点でアンケートに回答した19名を対象とした。

質問紙構成

問1は、公開授業に関する質問項目から構成された。学生と市民と一緒に受講するという公開授業の形態の評価（問1-1；自由記述）、公開授業の回数の適切さ（問1-2）、望ましい回数（問1-3；自由記述）および公開授業に対する感想（問1-4；自由記述）をそれぞれ質問した。

問2は、福島大学の生涯学習支援活動に対する要望を問う質問項目であった（問2-1；自由記述）。

なお、具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

手 続

公開授業の担当講師にアンケート用紙を事前に配布

し、回答を依頼した。調査2のアンケート用紙と併せて、生涯学習教育研究センターに提出していただくという方式で行った。

結 果

以下、アンケートの結果について述べる。なお、講師向けアンケートは自由記述部分が多く、定量的な集計を行うことが難しい。そこで、自由記述部分を筆者がカテゴリ化した上で、集計を行った。カテゴリ化に当たっては十分に配慮したが、場合によっては回答者の意に反してカテゴリ化されている可能性もあることを付記しておく。

問1の回答から、公開授業に対する評価についてまとめる。学生と市民が同じ授業に参加するという公開授業の形態に対する評価としては、「教員、学生にとっても緊張感が生まれる(5)」「一般市民は手本(4)」「よい方策(2)」「面白い(1)」と概ね好意的な評価で受けた(括弧内は回答頻度、以下同様)。少数意見ではあるが、「多様な年齢層相手は難しい(1)」、「公開講座と授業が同一ではやはり無理(1)」という否定的な評価もあった。また「一般の方が来学してもらうのが大変(1)」「少人数クラスならなお可(1)」という公開授業の改善すべき点を指摘する意見や「特に問題なし(3)」と通常の授業と比べて大きな変化はないとする意見もあった。

公開授業の回数については、「少なかった(5)」「やや少なかった(5)」「ちょうどよかった(8)」という回答分布であった(1名は回答を保留)。「ちょうどよかった」という回答以外は相応しい回数を回答してもらっているが、11名中6名が「全体の開放」が相応しいと回答した。

公開授業に対する感想では、「良い制度である(2)」「継続すべき(2)」「一般市民は学生以上に真剣(1)」という好意的な意見や「特に変化なし(1)」という中立的な意見が認められた。また、「開放科目の拡充すべき(1)」「受講者のニーズ把握が重要(1)」「(再来年度から開始を予定している)駅前サテライト教室での講義科目を開放(1)」「追加的参加を認めてほしい(2)」「受講調整でも聴講を認めて欲しい(1)」という公開授業の改善に関するコメントも認められた。その他「受講者が多様でやりにくい(1)」という否定的な意見も存在した。

問2の回答から、福島大学の生涯学習支援活動に対する要望についてまとめる。下記のような要望が寄せられた。貢献活動全般に対しては「公開授業は継続す

べき(2)」「大学開放が必要(1)」、貢献活動の方策に関しては「広報が必要(1)」「受講料は下げたほうがよい(1)」「もう少し多くの教員の参加が必要(1)」、貢献活動の評価に関しては「貢献活動をきちんと評価すべき(2)」、公開授業の実施面での問題点としては「市民受講者を受け入れた場合は、(収容人数の関係で)教室変更等が適宜行なえるとよい(1)」「アンケートをとることは事前に説明がなかった(1)」「公開授業は、受講者が確定した段階ですぐに担当者に知らせてほしい(1)」「ローテーション等である程度義務付けないと、公開する科目に偏りができるのではない(1)」という意見がそれぞれ寄せられた。

ま と め

対象者数が少ないこと、アンケートの自由記述部分が多く定量的な評価が難しいこと等から、一意の結論を導くことは差し控えなければならないが、公開授業の取り組みに対しては、ある程度好意的な評価を受けたのではないかと筆者は理解している。ただし、改善点を指摘する意見や否定的な意見には重要な示唆が含まれている。ここでは2つの問題、開放コマの回数と受講調整の問題についてだけコメントを加えたい。

受講者向けアンケートでは「開放回数が少なかった」という回答が約7割を占めていたが、講師向けアンケートでは「ちょうどよかった」という回答も比較的多かった。しかしながら、相応しい回数については、どちらのアンケートでも科目全体の開放を望む声が多い。既に述べていることであるが、公開授業の先行大学においてもこの制約は実施を困難にしている。受講者も担当講師も基本的には科目全体の開放という「聴講生制度」に類似した方式を望んでいると考えられる。以上のことから、公開授業と聴講生制度との制度的な意味での矛盾については、法人化以降速やかに解消できるよう検討するべきではないだろうか。

今年度の公開授業の試行では、正規学生だけで教室の収容人数を超えてしまった科目、つまり受講調整科目は自動的に公開授業科目から除外することとし、受講不可とするという対応を採った。しかしながら、受講調整科目となりやすいものは昼間に行われる語学や共通教育科目であり、これらは一般市民のニーズが高い科目でもある。公開授業は正規授業の一部開放であって、正規授業の成立を優先しなければならないわけだが、この問題についても今後の検討課題である。

6 結びに代えて

以上、今年度実施した3つのアンケート調査について概要を述べてきた。総じていえることは、受講者と講師の双方から、より一層の大学公開の必要性が指摘されているということである。このことを実現するためには、すなわち公開講座、公開授業ともに整備拡充を進めていくためには、解決しなければならない課題も多い。

まず、検討しなければならないのは広報の問題である。今年度は福島市近郊に新聞折り込み広告を配布することが大きな宣伝効果につながった。コストの面は考慮しなければならないものの、紙媒体による地区を限定した広報は効果が大いと思われる。しかしながら、より専門性の高い講座を企画した場合には、広く周知するだけでは効果が薄い場合もあり、ターゲットを絞った広報も必要となってくる。調査1では、少数意見ながらも講座を職場の掲示等で知ったという回答があり、講座内容に関心を持つと思われる企業や団体に向けた限定的な広報もまた有効であると思われる。どのような広報が効果的かは講座の内容や講座時間等の設定にも依存するため、適宜、(地区を限定しつつも)広く宣伝するタイプとターゲットを絞って集中的に宣伝するタイプを組み合わせることが肝要であろう。

最後に、公開講座、公開授業の拡充についてであるが、このためには何より本学教員の方々に幅広く協力を求める以外に道はない。法人化後、益々各種業務負担が増える中でさらに貢献事業に参画いただけるかど

うかは難しいといわざるを得ない。そのため、できるだけ無理のない形での協力のあり方を検討する必要がある。公開授業は正規授業を利活用するものであって、新規に講座を企画する必要がなく、比較的負担感の少ない貢献事業の一つといえる。しかしながら、先行大学での事例や今回のアンケートからも示唆されているとおり、科目の部分的な開放は講師の負担感を強める要因となっている。このことから、公開授業の制約については、今後検討を加え、改善を図っていきたいところである。

引用文献

- 木暮照正・筒井雄二(2003)．生涯学習ニーズ調査—過去の公開講座受講者と今年度受講者との比較—
福島大学生涯学習教育研究センター年報，8，3-12．
- 滋賀大学生涯学習教育研究センター(2003)．滋賀大学における公開授業—実施までの経過と課題—
- 富山大学生涯学習教育研究センター(2003)．富山大学オープン・クラス(公開授業)実施報告書

謝 辞

福島大学公開講座及び公開授業で担当講師を務められた方々および関係各位，特にアンケートにご協力いただいた方々に，この場を借りて感謝申し上げます。

平成 15 年 5 月 21 日

公開講座アンケート

平成 15 年 5 月

福島大学 公開講座委員会

(実施担当：生涯学習教育研究センター)

いつも福島大学公開講座をご利用いただき、ありがとうございます。これから福島大学において企画・実施する公開講座や生涯学習支援活動の改善の参考とするため、みなさまからのご意見をいただきたく、アンケート調査へのご協力をお願いいたします。回答はすべて統計的に処理いたしますので、個人データが取り上げられるような心配はありません。

以下の項目にご回答いただき、次の講座にこのアンケート用紙をご持参いただきますようお願い致します。その他は係員の指示に従ってください。

まず、あなた自身についてお聞きします。

問 1-1. 平成 15 年 5 月 1 日時点での年齢ですか？

() 歳

問 1-2. 性別をお答えください。当てはまる項目の数字に○をつけてください(以下同様)。

1. 男 2. 女

問 1-3. お住まいはどちらですか？市町村レベルでお答えください(例:福島市)。()

問 1-4. ご職業は何ですか？「その他」の場合は「7.」に○をつけた上で()内に具体的にお書きください(以下同様)。

1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業 4. 専業主婦
5. パートタイマー 6. 無職 7. その他()

問 1-5. 同居しているご家族はいますか？当てはまるものすべてに○をつけてください。

1. いない 2. 親 3. 配偶者 4. 子ども
5. その他()

問 1-6. 最終学校卒業をお答えください(例:4 年制大学卒)。()

(1)

(裏面へ続きます)

今回受講された公開講座についてお聞きします。

問 2-1. 今回、この公開授業をどのような情報源からお知りになりましたか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください。「その他」の場合は「7.」に○をつけた上で()内に具体的にお書きください。

1. 新聞の折り込みチラシ 2. 新聞の記事 3. テレビ
4. ラジオ 5. インターネット 6. 知人・友人の紹介
7. その他()

問 2-2. 今回受講された公開講座の難易度はいかがでしたか？

1. 易しすぎた 2. やや易しかった 3. ちょうどよかった
4. やや難しかった 5. 難しすぎた

問 2-3. 今回受講された公開講座に対する感想について、下の欄に自由にお答えください。

[]

今後のあなたの生涯学習講座への参加希望についてお聞きします。

問 3-1. 今回受講された公開講座の内容と関係のある生涯学習講座に、今後参加してみたいと思いますか？

1. 是非参加したい 2. 適切な講座があれば参加したい
3. 参加したいとは思わない

問 3-2. 先の問 3-1.で「1. 是非参加したい」及び「2. 適切な講座があれば参加したい」と回答された方にお尋ねします。その際、どのような講座をご希望されますか？

1. (多少難易度が上がってもよいので)より詳しい内容を扱う講座
2. (難易度を上げずに)詳しい内容を扱う講座
3. (今回の講座と内容が重ならないければ)同程度の講座

問 3-3. 先の問 3-1.で「1. 是非参加したい」及び「2. 適切な講座があれば参加したい」と回答された方にお尋ねします。参加を希望する講座に関して何かご要望があれば、下の欄内に自由にお答えください。

[]

(2)

問 3-4. 今回受講された公開講座の内容とは異なる別の分野・内容の生涯学習講座に、今後参加する予定はありますか？

1. 参加する予定がある
2. 参加する予定はないが、適切な講座があれば参加したい
3. 参加する予定はないし、特に参加する希望もない。

最後に、福島大学の公開講座に対するご要望についてお聞きします。

問 4-1. 今後、福島大学が行う公開講座で、どのような内容(テーマ)の講座なら受講したいと思いますか？(○はいくつつけても構いません)。

1. 教養を重視した講座(例:文学・歴史や時事問題を紹介する講座)
2. 資格取得を目指した講座(例:行政書士や介護福祉士の資格取得講座)
3. 実技の習得を目指した講座(例:英会話講座やパソコン講座)
4. 趣味を充実させる講座(例:スポーツ講座やガーデニング講座)
5. その他()

問 4-2. 先の問 4-1.で選択された内容(テーマ)で、あなたが特に福島大学に開催してほしいと思っている講座の具体的な内容(テーマ)について下の欄内に自由にお答えください。

[]

問 4-3. 福島大学の公開講座に対して何かご要望があれば、下の欄内に自由にお答えください。

[]

以上で質問は終わります。

記入漏れの項目がないかどうかご確認ください。次の講座にこのアンケート用紙をご持参いただきますようお願い致します。その他係員の指示に従ってください。

ご協力ありがとうございました。

連絡先：福島大学地域連携推進室研究協力係
〒960-1296 福島市金谷川1番地
TEL 024-548-8009/FAX 024-548-3180

(3)

平成15年5月21日

公開授業アンケート

平成15年5月

福島大学 公開講座委員会

(実施担当：生涯学習教育研究センター)

この度は福島大学公開授業を受講いただき、ありがとうございます。
今後、福島大学において企画・実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援活動の改善のための参考とするため、みなさまからのご意見をいただきたく、アンケート調査へのご協力をお願い致します。回答はすべて統計的に処理しますので、個人データが取り上げられるような心配はありません。
以下の項目にご回答いただき、担当講師まで提出してください。
よろしくお願ひ致します。

まず、あなた自身についてお聞きします。

問1-1. 平成15年5月1日時点で何歳ですか？()内にお答えください。
()歳

問1-2. 性別をお答えください。当てはまる項目の数字に○をつけてください。
1. 男 2. 女

問1-3. 最終学校卒業を、()内にお答えください(例：4年制大学卒)。
()

問1-4. お住まいはどちらですか？()内に市町村レベルでお答えください(例：福島市)。
()

問1-5. ご職業は何ですか？当てはまる項目の数字に○を1つつけてください。「その他」の場合は「7」に○をつけた上で()内に具体的にお書きください。
1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業 4. 専業主婦
5. パートタイマー 6. 無職 7. その他()

(1)

裏面へ続きます

問1-6. 同居しているご家族はいますか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください。項目に挙げた方に以外に同居家族がいらっしゃる場合には「8」に○をつけた上で()内に具体的にお書きください。

1. いない 2. 親 3. 配偶者 4. 子ども
5. その他()

過去1年間のあなたの生涯学習講座への参加状況についてお聞きします。

問2-1. 過去1年以内に、いくつかの生涯学習講座(大学、公民館、民間開設の種別を問わず)に参加しましたか？回数を()内にお答えください。
なお、一連の公開講座など(例えば、4回の講演会で1シリーズとするなど)は1回とと考えてください。
()回

今回受講された公開授業についてお聞きします。

問3-1. 今回、この公開授業をどのような情報源からお知りになりましたか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください。「その他」の場合は「7」に○をつけた上で()内に具体的にお書きください。

1. 新聞の折り込みチラシ 2. 新聞の記事 3. テレビ
4. ラジオ 5. インターネット 6. 知人・友人の紹介
7. その他()

問3-2. 今回受講された公開授業の難易度はいかがでしたか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 易しすぎた 2. やや易しかった 3. ちょうどよかった
4. やや難しかった 5. 難しすぎた

問3-3. 一般学生と一緒に授業を受けるという公開授業の形態についてどう思われましたか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 一般学生と一緒に授業を受けられた方がよい
2. 一般学生とは別に、市民の受講生のみで授業を受けられた方がよい
3. どちらとも言えない

(2)

問3-4. 今回受講された公開授業の回数(試験期間を除き、6回9時間分)についてどう思われましたか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。
1. 少なかった 2. やや少なかった 3. ちょうどよかった
4. やや多かった 5. 多すぎた

問3-5. 問3-4で「3. ちょうどよかった」と答えた方以外にお聞きします。公開授業として適切な回数・時間とはどれくらいと思われますか？下の欄に自由にお答えください。
[]

問3-6. 今回の公開授業を受講された1番の理由は何ですか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。「その他」の場合は「4」に○をつけた上で()内に具体的にお書きください。

1. 授業内容自体に興味関心があったから
2. 学生と一緒に授業を受講してみたかったから
3. 資格取得などの目標があって、そのために活用できると思ったから
4. その他()

問3-7. 仮に、今回の公開授業とほぼ同様の内容が、通常の公開講座(受講者は一般市民のみで、開催時間帯は平日夜間や土日昼間など)として実施されたとして、受講を希望されますか？「その他」の場合は「3」に○をつけた上で()内に具体的にお書きください。

1. 受講を希望する 2. 受講を希望しない
3. その他()

問3-8. 問3-7の回答理由を下の欄にお答えください。
[]

問3-9. 今回受講された公開授業や福島大学の公開授業全般に関する感想やご意見について、下の欄に自由にお答えください。
[]

(3)

裏面へ続きます

今後のあなたの生涯学習講座への参加希望についてお聞きします。

問4-1. 今回受講された公開授業の内容と関係のある生涯学習講座(大学、公民館、民間開設の種別を問わず)に、今後参加してみたいと思いますか？
1. 是非参加したい 2. 適切な講座があれば参加したい
3. 参加したいとは思わない

問4-2. 先の問4-1で「1. 是非参加したい」及び「2. 適切な講座があれば参加したい」と回答された方にお尋ねします。その際、どのような講座をご希望されますか？

1. (多少難易度が上がってもよいので)より詳しい内容を扱う講座
2. (難易度を上げずに)詳しい内容を扱う講座
3. (今回の講座と内容が重ならなければ)同程度の講座

問4-3. 今回受講された公開授業の内容とは異なる別の分野・内容の生涯学習講座(大学、公民館、民間開設の種別を問わず)に、今後参加する予定はありますか？

1. 参加する予定がある
2. 参加する予定はないが、適切な講座があれば参加したい
3. 参加する予定はないし、特に参加する希望もない

問4-4. 福島大学の実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援活動に対するご要望について、下の欄に自由にお答えください。
[]

以上で質問は終わります

記入漏れの項目がないかどうかご確認いただいた上で、担当講師まで提出してください。

ご協力ありがとうございました。

連絡先：福島大学生涯学習教育研究センター

(4)

平成15年5月21日

公開授業アンケート(講師用)

平成15年5月

福島大学 公開講座委員会

(実施担当：生涯学習教育研究センター)

この度は福島大学公開授業の試行にご参加いただき、ありがとうございます。
今後、福島大学において企画・実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援活動の改善のための参考とするため、講師のみなさまからのご意見をいただきたく、アンケート調査へのご協力をお願い致します。

よろしくお願い致します。

今回の公開授業についてお聞きします。

問 1-1. 市民の受講者が一般学生と一緒に授業を受けるという公開授業の形態についてどう思われましたか？下の欄に自由にお答えください。

問 1-2. 今回の公開授業の設定回数（試験期間を除き、基本的に6回9時間分）についてどう思われましたか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 少なかった 2. やや少なかった 3. ちょうどよかった
4. やや多かった 5. 多すぎた

問 1-3. 問 1-2 で「3. ちょうどよかった」と答えた方以外にお聞きします。公開授業として適切な回数・時間とはどれくらいと思われますか？下の欄に自由にお答えください。

問 1-4. 今回の公開授業に関する感想やご意見について、下の欄に自由にお答えください。

(1)

(裏面が続きます)

本学の生涯学習支援活動全般についてお聞きします。

問 2-1. 本学の実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援活動に対するご要望について、下の欄に自由にお答えください。

以上で質問は終わりです。

記入漏れの項目がないかどうかご確認ください。

公開授業受講者のアンケート分と併せて、アンケート回収用封筒に同封の上、下記連絡先まで学内便等でお送りくださいますようお願い致します。

ご協力ありがとうございました。

連絡先：福島大学生涯学習教育研究センター 木暮

内線 3372 (024-549-5010)

kogure@educ.fukushima-u.ac.jp

教官メールボックスは教育学部教官控室に設置されています。

(2)